

3月



あの日のあの川 リレー日記 ～第14話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第14話主人公 向田 隼

(筑波大学大学院 システム情報学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：栃木県巴波川)

「青春以前」

いつのこと？：小学生

どこの川？：蓮花川

「あの日のあの川」。そう言われて思いつくのは実家の近くを流れていた小さな川。名前は蓮花川。当時小学生だった僕は、その小さな川にかかる、名前も無いような小さな橋を渡って毎日学校へ通っていた。蓮花川は、利根川水系の支川である渡良瀬川の支流だそうだ。もちろんそんなことは、当時は知らなかったし、興味も無かった。蓮花川は、登下校途中に通るただの小さな汚い川。それでも「あの日のあの川」と言われて真っ先に思いつくのは、この蓮花川なのだ。それは恐らく下校途中に毎日のように、その汚い川に入って遊んでいたからだと思う。「あの日のあの川」と言われずとも、「川」と言われて想像するのはいつもこの蓮花川なのだ。だからこの日記は、今回に関しては「あの頃のあの川」として書かせてもらおうと思う。あの頃、小学生のときの蓮花川との思い出を。人からしたらありふれていて、大した思い出ではないと思うけれど、個人的にはとても大切な思い出を綴るのが日記であると僕は思うから。

僕の地元はいわゆる田舎で、家の周りにはほとんど畑か田んぼ。遠くを見ても山ばかりだった。そんな田舎の子供たちが遊ぶ場所は、ほとんど野外しかなかった。だから当然のように僕らは、山の中に秘密基地を作ったり、空き地で戦争ごっこをしたり、畦道で蛙を捕まえたりして遊んでいた。それと同じ感覚で、下校途中には蓮花川で遊んでいた。

当時、よく一緒に下校していた友達がいた。僕は彼のことをげんちゃんと呼んでいた。彼は小学生にしては体が大きく、痩せ形の僕とは対照的だったが、何故か馬が合った。彼も田舎の子供の例にもれず、野外で遊ぶのが好きだった。だから気が付けば、蓮花川は僕とげんちゃんの下校途中の遊び場になっていた。蓮花川はコンクリートの小さな橋の下を流れていたが、橋の起点に用水路との合流点があり、そこが僕らにとっての蓮花

川への入り口だった。ランドセルを用水路脇の畦道に放り投げ、靴下を脱いで、ズボンの裾をたくし上げて、小学生にとっては少し高さのある場所から勢いをつけて飛び降りる。用水路の水が川へ入り込む所の川底はコンクリートだったので足の裏が痛いことはなかったが、苔がびっしり生えていてぬるぬるしていた。だから、着地の瞬間は、滑らないかどうかいつもどきどきしていた。そのぬるぬるの感覚は今でも思い出せる。とにかくこうして蓮花川に入ることができたら、あとは面白そうなものを見つけて、ひたすら日が暮れるまで遊び続けるだけだった。時にそれはザリガニだったり、オタマジャクシや蛙だったり、変わった形の石ころだったり、空き瓶や空き缶だったり、正体不明の機械の部品だったりした。何だって面白く、何だって遊び道具にすることができた。蓮花川は、「子どもたちがきゃっきゃと遊ぶ川」と言われて想像するような透き通った綺麗な川ではなく、「どぶ川」と言った方が良さそうな川で、水は常に濁っていて川底は全く見えない。でもそれが逆に、僕らにとっては良かったのかもしれない。足の指先に当たる不思議な物体の感覚。なんだろうかと想像をめぐらす。それをなんとか引き上げたら、ただの空き瓶だった。そんなことだらけで、まるで宝探しをしているようなわくわく感があつた。

ある日、いつもの通りにげんちゃんと蓮花川で遊んでいたら、げんちゃんが下流の方へ行ってみようと言った。僕らはいつも用水路との合流点付近でしか遊んでいなかったのだから、げんちゃんのその発案は、僕にとっては「冒険の旅に出よう」と言われているのと同じだった。僕はもちろん同意した。僕らは長めの木の枝を杖代わりにして、下流へと向かった。川底が見えないので、僕らは慎重に進んだ。下流へ進むにつれて、足の裏に当たる石の大きさが少しずつ大きくなっていくのを感じた。突然深くなる場所があったり、異様にぬるぬるしている場所があったりして、本当に冒険をしている気分だった。

僕らがいつも遊んでいた場所の水深はそれほど深くなかった。水面はいつも足首当たりか、深くてもふくらはぎのあたりにあつた。でも下流へ進むにつれて水深はどんどん深くなり、いつの間にか膝の上くらいまで水面が来ていた。たくし上げたズボンの裾は、既にすっかり水の中に沈んでいた。僕らはこれ以上は進めないと判断し、引き返すことにした。いつものように宝探しをしながら引き返していると、僕は突然足の裏に激痛を感じた。たぶんガラス瓶の欠片か何かで足の裏を切ったのだろう。泣き虫だった僕は、普段であれば泣いていただろう。でもその時は、勇敢な冒険家になり切っていたからか、それすらもひとつの冒険中の試練だと感じて、苦痛ではなかった記憶がある。共に冒険する仲間として、げんちゃんは僕を精一杯サポートしてくれた。蓮花川の入りに無事帰還し、地上へと戻る際も、げんちゃんは手負いの僕を気遣って手助けしてくれた。

この冒険は今思えば、20メートルも無いくらいの距離だったけれど、当時の僕らにとっては大冒険だった。何の発見も無かつたし、僕は怪我もした。普通なら嫌な思い出になっていたかもしれないけれど、見えない足場を進むわくわくとどきどきが何より楽しかつたし、げんちゃんが僕を気遣ってくれたこともとても嬉しかつた。翌日、僕は足の裏に絆創膏を貼って、また蓮花川で当然のように遊んだ。僕らにとって蓮花川は、怪我の痛みなんて気にならないくらい楽しい遊び場だったのだ。

それほど魅力的な遊び場だった蓮花川も、中学生になった頃からは僕もげんちゃんも、全く入らなくなっていた。新しい仲間や、部活動や、初恋。そんな所謂青春の始まりに、僕らは新たな魅力を感じ始めていたからだ。だから、蓮花川は僕にとって、青春以前の季節の思い出の場所なのだ。今では地元へ帰るたびに、蓮花川をちらっと覗いては、あの頃にほんのちょっとだけ帰る。蓮花川は今の僕にとって、小学校の卒業アルバムの1ページのような場所になっている。

(次は工藤拓哉さんにバトンを託します)

